



J.Y.P.S.
Japan Youth Platform for Sustainability

2016年2月28日

2月26日 G7 ユース勉強会@三重大学 報告書

1. まとめ

Japan Youth Platform for Sustainability(JYPS)は、「動く→動かす」と「三重大学生物資源学研究科国際交流委員会」との共催のもと、G7 ユース勉強会を三重大学にて開催した。特に東海の若者に G7 サミットに対して関心を持ってもらうとともに、アドボカシーについて理解を深め、今後共に活動する人材を育成することを目的とした。勉強会は主に、下記3部構成で行った。

- ①G7 サミットの歴史と市民のかかわり
- ②アドボカシーの意義と若者の参画
- ③グローバルイシューを自分ごとにする

スピーカー1名とパネリスト2名を外部から招待し、グローバルとローカルの繋がりについて伝えることができた。また事前申込数を大きく上回る若者に参加いただき、G7 サミットや国際問題に対する関心を持つ若者が多数いることを確認できた。今後も三重大学において、4月に改めて勉強会を開催し、さらなる若者のモビライゼーションに力を入れていきたい。

2. 開催情報

1. 日時: 2016年2月26日(金) 13:00 ~ 15:00
2. 場所: 三重大学 生物資源学部棟
3. 参加者数: 43名
4. 招待講演者
 - a. 稲場 雅紀 / 動く→動かす
 - b. 吉松 隆夫 / 三重大学生物資源学研究科
 - c. 岩城 ひろこ / 伊勢志摩まちづくり団体 楽笑 Raku-sho
5. 主催側一覧

- ・主催 : Japan Youth Platform for Sustainability
 - a. 小池 宏隆 / 代表理事
 - b. 外池 英彬 / 政策統括
 - c. 久保田 彩乃 / キャンペーン統括
- ・後援 : 動く→動かす/生物資源研究科国際交流委員会

3. イベント要旨および講演録

1. セッション1 「G7 サミットの歴史と意義 - NGO の役割」 稲場 雅紀

日本が G7 諸国、そして世界経済において非常に大きな影響力を有していることをわかりやすく紹介し、日本政府の決定や考えを変えることの大きな意義について説明した。その上で、世界の市民社会がどのようなアクションをしたのかを振り返った。例として、2000 年のジュビリーの問題と 2005 年の

「Make Poverty History」が挙げられた。市民社会がどのように政策提言と対話を行ってきたのか、また 2008 年の洞爺湖サミットにおける日本の市民社会の活躍についても解説がなされた。



2. セッション2 「G7 と世界を変えるユースアドボカシー」小池 宏隆



国際協力の固定観念を変えるように、MDGs から SDGs に移行した社会情勢を説明し、SDGs 策定過程において、ユースがどれほど参画し、影響を与えたかを解説した。その後、アドボカシーの定義を踏まえ、ユース自身が自分たちのスペースを作り上げ、モニターする意義を述べた。政府や一部の団体が選

んだ若者だけでは本当の意味で多くの若者の意見を踏まえていないこと、その状態では真のアドボカシーにならない、と警鐘を鳴らした。現状に変化をもたらすために、自治するネットワークとしての JYPS についてと、企画している G7 ユースサミットについての紹介を行った。

3. パネルトーク「ローカライズとアクション“世界事を自分事に”」

パネラー：岩城ひろこ (伊勢志摩まちづくり団体 楽笑 Raku-Sho) / 吉松隆夫教授 (生物資源学研究所) / 稲場雅紀 (動く→動かす) / ファシリテーター：小池宏隆 (JYPS)

岩城氏：「伊勢志摩まちづくり団体 楽笑」は人と人をつないで、行政には対応されない問題を地域力で解決するための団体。七転び八起きにかけて、ガールズサミットとして7“転”のイベントを行い、サミット後に“八起”として何かやりたい。地域には海女さんなどがあり、地域として豊かなことを再確認。世界のことはわからないが、地域のことはわかる。G7に向けて地域の活動の力強さを伝えたい。

吉松氏：フィジー等で生物資源などを通じた地域創生に携わる。フィジーでも人の流出などが起きており、それは三重にも通ずる話である。今回のG7を通じて、地域創生における地域の資源の重要さなどの議論を持ち込みたい。今日のイベントには、海女さん関係に興味関心があり、参加している人も多い。みな具体的な話を探っている。このイベントを通じて、多くの三重大生がG7に関心を持ち、何かしら行動を起こし、JYPSが用意した舞台上で活躍できることを期待している。三重県はお国柄として、静かな受け身であるが、いいものを持っているのでぜひ声をあげてほしい。

稲場氏：アフリカでも、ローカルレベルでは日本の地方で起きていることと似たような問題も生じている。例えば青年の出稼ぎにより、地方の人口減少にどう向き合うのかが課題となる。アフリカではみんな英語で成功を狙おうとするところもあり、海外に出ていくことも多く、そうなるともう戻ってこない。ユースの動きは要でもあり、三重大からアクションが生まれることを大きく期待する。

